

3年生活動紹介

今回の3年生による舞台発表は、朗読劇の形でお送りします。
台本をみんなで読みながら、物語が展開します。
スライドでイラストが出ることもありますが、
みなさんも想像力を働かせながら鑑賞してください。
それから、みなさん、パンフレットのページに、自分がつくりたい世界の目標を書いてもらったと思います。劇の中で、そのページを掲げてもらう場面があります。その時はみなさん協力してください。
「郡中×SDGs」をテーマにつくった今回の劇発表。
最後までどうぞご覧ください。

タイトル「」

戸部オミ（トベ オミ 中学3年生）・・・
ワープ（アイインス星のネコ型ロボット）・・・
ダンサー1（ペルー人）・・・
ダンサー2（ペルー人）・・・
ダンサー3（ペルー人）・・・
ダンサー4（ペルー人）・・・
エリザベス（エゲレスの王女）・・・
レオ（エゲレスの王子）・・・
ヘンリアン（エゲレスの国王）・・・
兵隊（エゲレス王家につかえる。2人ほど？）・・・
ガゼラ（アイインス星を襲う怪物）・・・
フロスキー博士（ワープを作ったアイインス星の科学者）・・・

第1幕「ペルー編」

オープニング音楽

スライドに作品タイトルが出た後、
スライドに写されるペルーの風景
マリネラを踊る4人のダンサーたち
いきなり現れるオミとネコ型ロボットの「ワープ」

ダンサーたち「（スペイン語で驚く）！！！」
オミ「（周りを見回し）え、ちょっと、どこ連れて来たんだよ！」
ワープ「君の国の丁度反対側かなあ。」
オミ「え、外国??」
ダンサー「（スペイン語）」
オミ「え〜っと、アイム、フロム、ジャパ〜ン、オーケー？」
ダンサー1「（スペイン語）??？」
オミ「え、え〜っと・・・ああ〜ちゃんと英語勉強しておけば良かった〜」
ワープ「そもそも英語じゃないから。」
オミ「え？」
ワープ「とりあえず、これ、頭につけて。」
オミ「え〜、こんなリボン付けるの、やだな。」
ワープ「（怒って）リボンじゃない！猫耳だよ！」

オミ「余計イヤだよ！」
ワープ「僕とお揃いの耳を付けられて光栄に思うんだね。」
オミ「誰が・・・」
ダンサー1「君たち、いったいどこから現れたんだ！」
オミ「うわ、言ってることが分かる！」
ワープ「僕が君と話せていたのもこれのおかげだよ。」
オミ「じゃ、僕の言葉も通じてる??」
ダンサー2「あなた、見慣れない顔だけど、誰なの？」
オミ「僕は戸部オミ。で、こいつが・・・そういえば名前なんていうの？」
ワープ「さぁ・・・？僕は名付けられる前に、旅に出ちゃったからね。」
オミ「はぁ？じゃあさ、・・・『ワープ』で。」
ワープ「ワープ??」
オミ「突然僕の前に現れたと思ったら、また全然別の場所に連れてくし・・・。瞬間移動しまくるからワープ。」
ワープ「ワープかぁ。」
ダンサー3「君、もしかして日本人かい??」
オミ「あれ？分かります??」
ダンサー4「ペルーと日本は昔からつながりが深いからね。」
オミ「ペルー!？」
ダンサー3「中南米の国の中で、最初に日本と国交を結んだのがペルーさ。」
ダンサー4「日系人の友達もいっぱいいるわよ。日系人が大統領になったこともあるしね。」
オミ「へえ～・・・（ワープに）ペルーまで連れてきてどうすんだよ！」
ワープ「僕の胸にあるタービンが、なんか、うずいたんだよ。」
オミ「意味わかんないって。」
ダンサー1「まあまあ、遠路はるばるペルーまでようこそ！歓迎の踊りでも披露しようかな？」
ワープ「お・ど・り？」
オミ「あれ・・・、その白いハンカチ・・・もしかして、あなた達マリネラ踊る人??」
ダンサー2「あら、マリネラのこと、知ってるの？」
オミ「僕の行ってる学校にもマリネラやってる人が来て、見せてくれたことがあるんです。」
ダンサー1「なら話が早い。どうです？あなたも一緒に踊りませんか？」
オミ「え～僕は・・・」
ダンサーに手を取られ、たどたどしい感じでオミ踊る
ワープ「チャン♪ チャン♪ チャン♪・・・緊急地震速報です。」
オミ「え!!??」
ワープ「強い揺れに警戒してください」
地響きが聞こえて
ダンサー4「急いで逃げましょう！」
オミ「え、ちょっと、じっとしてないと危ないよ・・・！」

強い揺れが襲う
地震の惨状がスライドに出る

オミ「ペルーにまで来て地震にあうなんて・・・」
ワープ「ここも君の国と一緒に、大きな地震が起こりやすいみたいだね。」
オミ「そうなの？」

ワープ「54年前の地震では1万5千人亡くなったと記録にあるよ。」
オミ「うわぁ・・・それって東日本大震災と同じくらいだよ・・・」
ワープ「さぁ、この事態をどう解決しよう！」
オミ「え、解決！？・・・僕が？」
ワープ「そう。」
オミ「え、そもそもさぁ・・・なんでワープは僕のところにきたの？」
ワープ「それはね・・・君が世界について考えていたからさ！」
オミ「は？」
ワープ「君の声が聞こえたんだ。『誰一人とり残さない世界にするために、僕に何ができるんだー！』・・・って。」
オミ「いや、それは・・・」
ワープ「僕は君の志に感動したんだ！君とならきっと、世界を救うための何かを見つけ出せるに違いないって。」
オミ「あのさぁ、ワープ・・・」
ワープ「なに？」
オミ「僕が考えてたのはさぁ・・・、宿題なんだよ。」
ワープ「宿題？」
オミ「SDGsって知ってる？・・・知るわけないか。」
ワープ「サステナブル ディベロップメント ゴールズ 持続可能な開発目標」
オミ「そう、それ。・・・なんでも知ってるなぁ。」
ワープ「ウィキペディア参照。この星のネットワークはなんでも載ってるね。」
オミ「ウィキかよ。」
ワープ「で、宿題って？」
オミ「学校の宿題でさぁ『SDGsを達成するために、自分ができることを考えましょう』って。作文で書かなきゃいけないの。その内容を考えてただけ。どうやって原稿用紙埋めようかなあって。」
ワープ「宿題ってことは、学校のみながそれを考えるのかい・・・？」
オミ「そう。だから、僕はワープが思ってるような大それたことを考えてるわけじゃ・・・」
ワープ「すばらしい！！」
オミ「え？」
ワープ「みんなで考える、素晴らしい！・・・僕はずっと一人だったから、そんな発想なかったなぁ・・・やっぱり君に来てもらって正解だった。」
オミ「無理やり連れて来ただけだろ？僕なんかと一緒に考えたってどうにもならないって。地震だってそもそも防げっこないし。」
ワープ「地震そのものはどうにもならないかもしれないけど、」
ペルーの人たちが駆け寄ってくる
ダンサー1「オミ！」
オミ「あ、さっきの人たち。」
ダンサー1「よかった、君たち、無事だったんだね。」
ダンサー2「ねえ、マリアは一緒じゃない？」
オミ「え、いなくなったの？」
ダンサー1「どこに行ってしまったんだ。」
ダンサー2「(パニック気味に)ねえ、これからどうしたらいいの!？」
ダンサー3「寝床も、食べるものもないし・・・」
オミ「えっと、とりあえず、避難所に行ってみませんか？マリアもそこにいるかも。」
ダンサーたち「ひなんじょ??？」
オミ「あれ、通じてない？この猫耳、壊れたのかな？」

ワーブ「いや、壊れてなんかないよ。」

オミ「ひなんじょ！決まってませんか？地震が起きたら逃げる場所。」

ダンサー1「私の生まれた小さな村では、何かあれば中央の広場に集まるって習慣があったんだが・・・。」

ダンサー3「ここみたいな都市部では、どうなってるか聞いたことないよ。」

オミ「あと、食べ物を貯めておく所とかは？」

ダンサー2「そんなことしてないと思うわ。」

オミ「え、学校で避難訓練とかしたことはないですか？」

ダンサー2「学校で地震の話なんかしたことはないわよ。」

オミ「そうなの？・・・普通にやってるもんだと思ってたなあ」

ワーブ「教えてあげたら？君が普通にやってるってことを。」

オミ「え？できるかなあ・・・」

ワーブ「ものは試し。」

オミ「えっとねえ・・・、さっきもみんなバラバラに逃げたでしょ？日本ではね、どうやって逃げるのか練習するんです。子どもの時から。」

ダンサー2「練習？」

ダンサー3「私たちもコンテストに向けてマリネラの練習を精一杯しているが、練習でできなきゃ、本番でもできないしね。」

ダンサー2「けど、地震の本番はいつか分からないし、いつか分からないことを目標にがんばれるかしら。」

オミ「だから、忘れないように繰り返しやるんです。どの道を通して逃げるのか、どこに集まるのか。」

ダンサー2「それが決まれば、はぐれなくても済んだかもしれないわね・・・」

ワーブ「オミの国では、決めたことを地図にまとめたりもしてるんだね。」

オミ「そうそう。あと、食べ物をたくさん貯めておいたり、家から持って出る物も決めたい方が良いですよ。」

ダンサー1「なるほど。しかし、決めておいても、いざという時、全部持ち出せるだろうか。」

オミ「それも、普段から必要なものをカバンにまとめておくといいんです。すぐに持って逃げられるように。」

ダンサー2「それはいいアイデアね。みんなにも教えましょうよ。」

ダンサー3「でも、その前にマリアを探すのが先だ。」

ダンサー2「そうだね。・・・一体どこに」

ワーブ「みんな、マリアのことを強く念じてくれないかい？」

ダンサーたち「え？」

ワーブ「僕が瞬間移動する時は、いつも誰かの気持ちに引かれていた様な気がする。君たちの想いが引き合えば、マリアのところに飛べるかもしれない。」

ダンサー2「そんなことが？」

オミ「日本から飛んできた僕が保証しますよ。やってみましょう！」

ワーブ、皆を連れ、ダンサー4のもとへ飛ぶ

ダンサー4「みんな！」

ダンサーたち「マリア！」

ダンサー4「もう会えないかと思った。」

ダンサー2「この人たちのおかげよ。」

ダンサー3「すごい力を持ってるんだね。」

ワーブ「それほどでもあるよ。」

オミ「謙遜しろよ。」

ダンサー2「ねえ、さっきの練習とかの話だけど、」

ダンサー1「今は、このありさまだからね。落ち着いてしばらくしたら話そう。」

ワープ「持続可能・・・」

オミ「え？」

ワープ「SDGsのSは持続可能。『続ける事ができます』ってことだよ。今思っただけじゃなく、考え続ける、動き続ける」

オミ「続けられる・・・」

ダンサー3「やっぱり、今からでも始めていけばいいんじゃないかな？できるところから。」

ダンサー1「そうだね。思えば、人がたくさんいる所ほど、こういったことがしっかり決められていないんだ。」

ダンサー2「たくさんいる方が混乱しやすいのにね。」

ダンサー1「そうだ。考えることは山ほどあるぞ。良い事を教えてくれてありがとう。」

オミ「いや、別に大したことは・・・」

ダンサー3「みんなで相談しながら乗り切ってみせるよ。」

ダンサー4「落ち着いたら、是非、また一緒にマリネラを踊りましょう！」

オミ「ハハハ、そうだね。みなさんも気を付けて。よいしょっと（頭の猫耳を外し）・・・そんな気軽にペルーまで来れるかな・・・」

ダンサーたち「（スペイン語に戻り）グラシアス！」

ダンサーたち、去っていく

オミ「グラシアス！・・・えらそうなこと言っちゃったけどさ、正直そこまで真剣に避難訓練したことないんだよね。振り返りの紙には気を付けますって書くんだけど、ずっと思い続けてる訳じゃないしなあ・・・」

ワープ「だとしても、やってるとやってないとは、大きな違いってことだね。・・・あ！」

オミ「どうしたの？」

ワープ「僕の胸のタービンがうずきだしてきた。次の世界にひかれてるみたい。行こう！」

オミ「次？え、もう帰ろう・・・」

ワープ「ワープ！！！」

第2幕「過去のエゲレス編」

スライドにイギリスの宮殿内の写真が出る

オミ「うわ、ひろっ！・・・きれいだなあ。」

ワープ「立派だなあ。どこかの宮殿のようだね。」

オミ「どこかって、あやふやだなあ。ここも絶対日本じゃないって・・・。さっさと調べてよ。」

ワープ「それが無理なんだ。」

オミ「え？」

ワープ「さっきまでいたペルーと違って、この世界にはコンピューターのネットワークが無いみたい。検索ができないんだよ。」

オミ「そんな、今時ネットの使えない場所なんて・・・、え、昔の時代に来ちゃったってこと？」

ワープ「分からない。そもそも、ここが地球なのかどうかも。」

オミ「そんな、勘弁してよ！」

ワープ「とにかく、宮殿の中を探してみよう。」

2人は綺麗なドレスを身にまとった女性と鉢合わせする。

エリザベス「(英語で悲鳴)!!」
オミ「あれ、また、マリネラの人!？」
ワーブ「どうやら違う感じだよ。ほら、猫耳付けて。」
オミ「また~？」
エリザベス「何者です、そなたたちは。」
ワーブ「わ、我々は怪しい猫ではないです。」
オミ「どう見ても怪しいよ、僕たち。」
ワーブ「ふ、不法入国とかでもないです。」
オミ「黙って入った分にはそうだよ。」
兵隊「(部屋の外から)王女様!どうかなさいましたか!？」
エリザベス「(兵隊に)大丈夫よ。(ワーブ達に小声で)カーテンの裏に隠れておきなさい。」
兵隊「失礼します!(入室し)王女様、悲鳴のようなものが聞こえましたが。」
エリザベス「驚かせてごめんなさい。飛び出してきた野良猫にビックリしただけですわ。」
兵隊「左様でしたか。野良猫め、捕まえてまいります。(部屋を出る)」
エリザベス「放っておきなさい。・・・(2人に)もういいわよ。」
ワーブ「(出てきて)野良猫ってのは僕の事？」
オミ「いいんだよ。あの・・・王女様なんですか・・・？」
エリザベス「エゲレス王国の王女、エリザベスよ。」
オミ「エゲレス?・・・イギリスのことかな??」
ワーブ「だから分かんないって。」
エリザベス「おもしろいわね。久しぶりの客人があなた達で嬉しいわ。」
オミ「あの・・・なんで、僕たちの事、かばってくれたんですか？」
エリザベス「本当に怪しい人は、自分たちを指して怪しいなんて言わないわ。でしょ？」
オミ「じゃあ、ワーブはアウトじゃん。」
ワーブ「わ、我々は・・・」
エリザベス「ワーブっていうのね。あなたは？」
オミ「と、戸部オミです。いやあ~王女様なんて、会うの初めてだから緊張するなあ。」
ワーブ「うらやましいねえ、こんな綺麗な所で暮らせて。」
エリザベス「本当にそう思う・・・？」
オミ「え？」
エリザベス「たしかに王家の暮らしは華やかかもしれない。でも、民衆は違う。奴隷同然に四六時中働かされ、全てを吸い上げられ・・・。華やかさはその恩恵によるものなの。けど、こんな状態がいつまでも続けられる訳がないわ。」
オミ「持続不可能な開発かぁ・・・」
エリザベス「開発??」
ワーブ「産業を盛んにすることだよ。」
オミ「産業っていえば・・・、エゲレスによく似た国の話なんですけど、その国は、世界で初めて産業革命ってのをやったんです。」
ワーブ「産業革命？」
オミ「そこから世界の技術はどんどん発展して行って、僕らの暮らしはとても便利になる・・・って学校で出てきた。」
エリザベス「例えば、どのようなことができるのです？」
オミ「例えば・・・、空や月まで飛んで行ったり、いろんなエネルギーで機械を動かしたり、遠く離れている人とお話が出来たり・・・」
ワーブ「あと瞬間移動出来たり。」
オミ「それは無理!っていうか、ワーブさあ、君の技術力って随分先を行ってると思うんだけど、もしかして未来から来たとかソッチ系？」

ワーブ「まあ・・・、その辺はおいおいね・・・」
エリザベス「このエゲレスの未来で、そんな革命が起こせるとは到底思えない。オミ？今の話、お父様にもしていただけないかしら？」
オミ「お父様って・・・もしかして王様のことですか？」
エリザベス「エゲレスのヘンリアン国王よ。」
オミ「ええええええええ！」

ワーブとオミは、国王のもとへと通された

エリザベス「ということですの。お父様。」
ヘンリアン「話すことはそれだけか？」
オミ「え！？は、はい・・・」
ヘンリアン「そのような夢物語を聞かせて、余にどうしろと？」
エリザベス「ですから、行き詰っている我が国の現状を変えるには、国の動かし方を変えていかねば・・・」
ヘンリアン「余にはこのエゲレスの国体を守る義務がある。民衆を統治し、懸命に働かせ、国力を維持しなければ。いつ隣国からの脅威にさらされるとも限らん。夢物語に付き合っている暇はない。」
ワーブ「脅威・・・」
エリザベス「国力の維持は分かります。けどこのままでは、維持どころか衰退へと向かって・・・」
ヘンリアン「貴様たち！エリザベスをけしかけるとは・・・隣国の回し者か。」
オミ「僕たちが？」
ワーブ「違うって！」
ヘンリアン「その者たちを連れて行け！」
兵隊「はっ！！」
エリザベス「お父様！」
ワーブ「ちょっと、待ってって！」
オミ「ワーブ！瞬間移動で・・・」
ワーブ「よ～し・・・、ダメだ、てんばっててうまくいかない！」
オミ「しっかりしてよ」

外に連れ出された2人

レオ「手荒なことをするな、お前たち。」
兵隊「レオ王子！」
エリザベス「聞けばエリザベスの友人ということではないか。丁重にしろ。」
兵隊「しかし・・・」
レオ「お父様には俺から話す。いいな。」
兵隊「はっ！・・・」
兵隊去る
オミ「はぁ・・・ひどいめにあった。」
ワーブ「あの国王、ムカつく奴だなあ。」
オミ「おい、ワーブ！この人も国王の・・・」
ワーブ「あ！」
レオ「ふん、構わないさ。」
エリザベス「（駆け寄って）お兄様～！！」
レオ「またお父様とやりあったなエリザベス。」

エリザベス「ごめんなさい、2人とも。私の願いを聞いてくれたばかりに。」
ワーブ「全然、気にしちやいません。」
オミ「さっきムカつくって・・・」
エリザベス「お兄様、この国には、産業や技術の革新なんて望めないのかしら。」
レオ「この国では、どんなに努力しようと、その成果が認められることはない。自由な時間もなければ、権利もない。上から指示された事をひたすらこなしていただけた。そのような中で、どうやって新たな技術や文化が生まれてくるっていうんだ。」
エリザベス「民衆の中に、新しい閃きが眠っているかもしれないのに。私たちはそれを眠らせたまま、終わりを迎えてしまうのですか？」
レオ「お父様はお父様で、国王を引き継いだ責任を感じておいでなのだよ。」
オミ「きっと余裕が無くてさ、国民一人一人のことなんか見えてないんだろうなあ。」
ワーブ「じゃあさ、見せればいいじゃん」
みんな「え??？」

数日後・・・

ヘンリアン「こここのところレオもエリザベスも、宮殿の外で何者かと接触しているようだ。まさかとは思うが・・・動向を探ってくるのだ。」
兵隊「かしこまりました。」
ワーブ「その必要はないよ。」
兵隊「貴様たち、どこから現れたのだ！」
オミ「王様、あなたに見てもらいたいものがあるんです。」
ヘンリアン「何？おい、くつつくな。」
ワーブ「離れないでね。ワーブ!!!」
飛んだ先にはレオ、エリザベス、そして大勢の民衆が集まっている。
(舞台下に、群衆役の人たちを集めておく)
ヘンリアン「これは・・・」
オミ「レオ王子とエリザベス王女が集めた、この国の人たちです。」
ワーブ「しっかりみんなと向き合っただけ。じゃあ！」
ワーブとオミ、瞬間移動
ヘンリアン「消えた・・・！」
エリザベス「お父様。お父様は常に宮殿の中から命令を下されてきた。まともに向き合ったことなんて無いじゃありません？しっかり、ご覧になって！」
レオ「決して王家に良い印象を持っていないであろう彼らが、それでも我らの呼びかけに答えてくれました。」
ヘンリアン「何をしている民衆ども、自分たちの作業に励むのだ！！」
エリザベス「彼らは、ただの労働力などではありません！我々と同じように、一人一人が、思い、考え、何かを生み出せる存在です。」
レオ「王家と皆の不平等をなくし、皆が働きがいを感じる事ができる世の中になれば、この国は必ずや次へ進めます！」
ヘンリアン「そのような国・・・この私には・・・」
エリザベス「お父様一人に任せっぱなしにはしませんわ。私たちも・・・いえ、みんなでやりましょう！」
ヘンリアン「エリザベス・・・」
群衆の声援が響く。

離れたところから見ていたオミとワーブ。
オミ「産業革命はきっと起こる。皆の暮らしは良くなるよ。」

ワーブ「うん……。けど、技術が進んでもなあ……」
オミ「どうしたの？なんか元気ないじゃん。」
ワーブ「また胸のタービンがうずいてきて……。だめだ、また別の世界に飛んじゃいそう
だ！」
オミ「え、ちょっと、置いていかないでよ！」
ワーブ「ワーブ！！」

第3幕「アイインス星編」

オミ、到着するなり、咳きこんでしまう。
オミ「（咳きこみ）うわ、なんだここ！まともに息が吸えない……」
ワーブ「猫耳のスイッチを入れて！エアカーテンを使えば呼吸できる。」
オミ「（苦しそうに）なに、それ……！」
ワーブ「見えないマスクみたいなもの。」
オミ「ふう～……どこなんだここ……絶対地球じゃないよね。」
ワーブ「とうとう戻ってきたんだ……」
オミ「戻ってきた？」
ワーブ「ここは、アイインス星。僕の故郷さ。」
オミ「ここが??」
ワーブ「今はこんな状態だけど、昔はアイインス星だって、地球と同じくらい空気も澄んで
て、海もきれいで、緑あふれた惑星だったんだ。科学技術も発展して、豊かな暮らしを手
に入れていた。……ところが、有毒なガスや汚染物質をまき散らす怪物『ガゼラ』に襲撃さ
れて、この星の環境をめちゃめちゃにされてしまった。」
オミ「怪物!？」
ワーブ「アイインス星のフロスキー博士は、最後の力を振り絞って僕を開発し、アイインス
星の未来を託したんだ。『世界を救う方法』を見つけ出して帰って来いって。博士の手で別
の世界へ送り出された僕は、ワーブ機能でいろんな世界を旅してきた。何年もの間……」
オミ「方法を見つけ出して、アイインス星を救う……」
ワーブ「そう、それが僕の旅の目的。」
オミ「そして、僕を連れだした……」
ワーブ「そう」
オミ「……ちょ、ちょ、ちょ、待ってって!!!さすがに問題が大きすぎるよ!!ペルー
もエゲレスも大概だったけどさあ。星を救うって……」
ワーブ「正直、僕も方法が分かった気がしないんだ。なぜ、今、ここに戻ってきてしまっ
たのか……」
オミ「ひょっとして……、今、動かないと、間に合わないってことかな……?」
ワーブ「そんなあ……」
オミ「そもそも、君を作れるぐらい科学が発達してたのに、倒せる方法が無いなんて、ガゼ
ラってどんな怪物なんだ……」
ワーブ「はあ……どうしよう、どうしたらいいんでしょう、フロスキー博士……!」
オミ「……ワーブさあ、今、エゲレスの王様みたいになってるんじゃない？」
ワーブ「僕が？」
オミ「博士からこの星を託されて、なんとかしなきゃって、一人で背負いこんで。」
ワーブ「……。」
オミ「一緒に考えよう。だから僕を連れて来たんでしょ？」
ワーブ「オミ!!」
オミ「それにさ、エゲレスみたいに、みんなを動かすことができればひょっとして……」

ワープ「そうなんだ。『みんなでやる』。これは僕にとって大きな発見だったんだ。・・・けど、どうすれば、力を合わせることができるんだろう。今、絶望の中にいる皆を集めて・・・」

オミ「う～ん、世界を救うってさ、ワープは、どんな世界を作りたいの？」

ワープ「僕の作りたい世界？」

オミ「ほら、目標を決めた方が、みんなも動きだせるっていうか。SDGsもさ、そのためにあると思うんだ。」

ワープ「SDGs・・・。オミ、お願いがある。」

オミ「なんだい？」

ワープ「今こそ宿題を仕上げてくださいませんか？」

次の日・・・

オミ「ああ～緊張するなあ」

ワープ「ごめんよ、僕は声を世界中に発信するので精一杯だから・・・」

オミ「分かっているよ。ワープはそっちに集中して。」

ワープ「じゃあ始めるよ。送信開始・・・出力全開！」

オミ「え～っと・・・聞こえますか？アイインス星の皆さん。今から少しだけ、僕の話聞いてください。」

オミ、SDGsについて書きあげた作文を、恥ずかしがりながらも読み上げていく。

オミ「SDGs達成のためにできること」

「（作文）」

オミ「3年8組 戸部オミ」

オミが作文を読み終わると、ワープの体から火花が散る

オミ「ワープ！」

ワープ「ハハハ、ちょっとオーバーヒートしちゃった・・・」

オミ「届いたかなあ・・・皆に」

雷鳴がとどろく

ガゼラ「お前たちか、妙なものを発信していたのは。」

オミ「あれが、ガゼラ??」

ワープ「変な奴のところに届いちゃったよ・・・」

オミ「てか、デカ過ぎでしょ！空一面覆われちゃったよ・・・」

ガゼラ「何をしようと、もう手遅れだ。俺様の吐き出すガスがこの星の環境を作り替え、お前たちが住めない新たな星へと生まれ変わらせる。この星はもう俺様のものだ。」

ワープ「僕は・・・この星にまだ友達がいない！」

ガゼラ「フハハハ、ならばこの星に執着する必要はなかろう。」

ワープ「僕が作りたい世界は、みんなで協力し合って、目標をかなえられる世界だ。お前だけの好きな世界にはさせない！」

ガゼラ「そのみんなとやらはどこにいる。一人で無駄なあがきはやめろ。」

オミ「一人じゃないよ。ワープ、ほらあそこ！」

そこへ客席から声が響く（学級委員や生徒会?）

「おーい！」

「君の声、届いたぞ～！！」

オミ「みんな、書いてきてくれたんだね！自分がつくりたい世界を！」

「おー！！！！」

オミ「この世界を作る主役は、誰であろう・・・みんなだ！」

「海の豊かさを守りたい！」

「陸の豊かさも守りたい！」

「きれいな水を世界中に！」

「クリーンなエネルギーをみんなに！」

「住み続けられるまちづくりを！」

オミ「みんなも、つくりたい世界を上にかかげて！みんなの目標を！」

ワープ「風が・・・風が吹いてくる・・・」

ガゼラ「風だと？」

ワープ「みんなの想いが風になって流れ込んでくる、僕の胸のタービンをグルグル回すんだ！」

オミ「みんな！風をワープに届けて！！！」

客席にパンフレットを振るように誘導

ワープ「よ～し、フル回転だ・・・とてつもない力が満ちてくる・・・ありがとうみんな！！！」

オミ「行けワープ！その力、全部ぶつけちゃえ！！！」

ワープ「ワープ・・・S・・・D・・・ビーム！！！！」

ガゼラ「ぐわああああああああ！！！！！！」

大きな爆発が起こる

オミ「ガゼラの身体が・・・有毒ガスが消えていく・・・」

ワープ「はぁ・・・やったね」

オミ「ワープ！・・・ってか、SDビームってなんだよ。」

ワープ「スーパーデラックスミラクルビーム。」

オミ「ダッサ！！」

エピローグ

オミ「それから僕たちは、ワープが作られたフロスキー博士の研究所を訪ねた。そして、フロスキー博士が残した最後の記録を見つけたんだ。」

フロスキー博士「ガゼラは、外宇宙から襲来して来たものではない。アイインス星の科学の発展の中で生まれ出た無数の廃棄物が、寄せ集まって誕生したものだ。始めから環境を破壊するために開発しようなんて者はいない。だが結果的には恐ろしい怪物を生み出し、世界を滅亡へと追い込んでしまった。これからの開発は、未来へ続いていくことが可能な形を期待する。」

オミ「これは、産業革命後の地球にも当てはまってくる。ひょっとしたら、僕はアイインス星に地球の未来を見たのかもしれない。実は全部夢だったりしてと、頭によぎった瞬間、僕はもとの世界へと戻されていた。宿題は一応書けたけどさ・・・こんな作文、誰が信じてくれるんだよ。もっと現実味のあるところに連れてってくれたら良かったのにさ。・・・な、ワープ・・・。」

しばらくの間があいて・・・

ワープ「呼んだ？」

オミ「うわ、びっくりした！」

ワープ「ねえ、もう落ち着いたころかな。」

オミ「何が」

ワープ「ペルーだよ！マリネラ踊りにいこう！」

オミ「随分気に入ったんだな。」

(おしまい)